



日本初！ 自動車運転免許センターへの 作業療法士の配置

行政（運転免許センター）の現場で作業療法士が関わる意義とは？

運転に影響する疾患をもつ者や高齢者が引き起こす重大事故が多く報道され、運転に関する相談や審査業務も増加している。その対策として、警察では免許センターでの保健医療職の活用を進めており、2018年6月に神奈川県警察運転免許センターで「日本初」となる作業療法士の配置が行われた。その経緯、配置後の状況、作業療法士への期待などについてお話を伺った。

田中 克己氏（神奈川県警察本部交通部運転免許本部運転教育課、警部補）

白岩 淑子氏（同、作業療法士）

〔聞き手〕 荻原 喜茂（日本作業療法士協会、副会長・機関誌編集委員長）

藤田 佳男（同運転と作業療法委員会、委員長）

1. 採用の経緯

●「目から鱗」だった作業療法士との出会い

荻原：まず、白岩さんの採用に至った経緯から教えていただけないでしょうか？

田中：きっかけは、藤田佳男さん（運転と作業療法委員会委員長）との出会いでした。ある研修会に私も講師として招かれて、そこで藤田さんにお会いして。作業療法士という名称は聞いたことがありました。でも、お恥ずかしい話ですが、どんな仕事をされているのかわかりませんでした。藤田さんや他の方の発表を伺って、「こういうことをされているんだ」と。

荻原：どのあたりが一番印象に残りましたか？

田中：運転免許センターでは、公安委員会の業務として、病気やケガをされた方、障害がある方の運転免許取得や更新の審査をしています。その審査を受ける方を援助している専門家がいることを初めて知ったんですよ。

荻原：なるほど。

田中：その後、中伊豆リハビリテーションセンターが自動車コースを所有していて、運転再開のサポートをしていると知りました。まさに「目から鱗」で、民間のレベルが非常に高いことに驚きました。

荻原：そういうご経験があったんですね。

●通常業務だけでなく研修も可能になる！

田中：その頃、警察庁から運転適性相談窓口医療系専門職を配置するようという通達があって、

看護師さんや保健師さんを採用する県も出始めていました。ただ適性相談は、病気の治療のための聴取ではなくて、医師に診てもらわなければならない判断がつけばよい、ということもあって、神奈川県警としては、看護師の配置はなくてもよいのではと考えていました。

荻原：それにも関わらず、作業療法士を採用しようと考えられたのは、なぜだったのでしょうか？

田中：当センターに作業療法士を招いて職員に対する研修会を開催しようと考えていたときに「そうか、作業療法士を採用すれば毎日研修してもらえるんだ！」と気づいたんです（笑）。

荻原：なるほど。たしかにそうですね。

田中：お恥ずかしい話ですが、医師が作業療法士の検査結果に基づいて診断書を書いていることを知りました。また、適性相談や臨時適性検査は、作業療法士のお仕事と重なっているとわかってきた。「これは採用に向けて検討するしかないだろう」と思ったわけです。

荻原：ありがとうございます。作業療法士は、病気や障害がある方が、仮に一人で生活できる状態にあれば、その方の生活がスムーズに進むようにお手伝いします。例えば脳卒中の方でも、「この程度なら運転できる可能性は高い」という判断材料を提供できます。固い言葉で言うと、情報処理や認知が日常生活でどう働いているかを評価できる。その能力を運転免許センターでもご活用いただきたいと考えていたのですが、こんなに順調に進むとは思っていませんでした。

●採用となった理由とは？

田中：私は、安全教育の中で「車の運転は認知、判断、操作なんです」と説明しているんですね。作業療法士さんは、そのすべてに関する専門家ということで、これほどどうってつけな職業はない。なぜ、もっと早く気がつかなかったんだろうと（笑）。

荻原：ありがとうございます。ただ、新たに職員を採用するにあたってご苦労もあったのではないかと

と思います。差し支えなければ教えていただけないでしょうか？

田中：作業療法士を採用する有用性を上司に説明して、課として「採用しよう」と方針が決まったので、次に人事当局に説明しました。道路交通法の改正もありましたし、担当者の方が作業療法士を採用する意義を理解してくれたことも大きかったですね。

荻原：初めての職種の採用となると、リスクもありますよね。

田中：常勤ではなく、非常勤で採用して効果測定をすることにしました。試行実施のかたちをとったので、早期に採用が決まったのだと思っています。

荻原：実際に面接をされて、第一印象はいかがでしたか？

田中：正直、どんな方が来るか不安でした。でも、白岩さんを一目見て「採用！」と（笑）。上司も同意見でした。白岩さんの人柄だと思います。ひとつ心配だったのは、白岩さんが警察カルチャーに耐えられるのかです。警察は、外部の方にとっては異質な世界だと思います。しかも女性です。ところが、すぐに職場に溶け込んでいただいて。まったくの杞憂でした。

荻原：お話を伺って非常に嬉しいです。作業療法士は、患者さんとの関係性をどうつなぎ、維持して、広げていくかを大切にしています。その姿勢を評価していただいた気がいたします。

2. 担当業務の内容

●本当に道路に出していいかを見極める

荻原：白岩さんが果たしている役割を、ご説明いただけますか？

田中：白岩さんが着任したとき、「これまでとは違うスタンスでお願いします」と伝えました。「作業療法士として、患者さんが再度運転できるようサポートをされてきたと思います。でも今日からは、



田中克己警部補



白岩淑子氏

この方を本当に道路に出していいのを見極めるのが仕事です」と。

荻原：なるほど。

田中：県民のみなさんは、努力して検査を受けに来られます。私たちは、きちんとした検査をして正確な結果を出す。それが県民サービスにつながると伝えました。今後さらに検査の質を向上させることが、白岩さんを採用した真の目的と言ってもよいと思います。

荻原：白岩さんは、そのミッションをクリアしていますか？

田中：あと3人ぐらい白岩さんを採用したいぐらいです（笑）。白岩さんと一緒に仕事することで、ほかの職員のスキルが上がっていると感じます。逆に白岩さんは、道路交通法など法的なことがわからないので、ほかの職員が教える。お互いのやりとりが自然と増えて、白岩さんが勤務する日は職場に活気がありますね。

荻原：そうですか。ほっといたしました。

田中：個人的には、最低でもあと1人は採用できたらと考えています。業務の質のさらなる向上はもちろん、白岩さんにとって相談相手になりますし。と言っても、私には採用決定の権限はないので、あくまでも個人的な思いですが（笑）。

荻原：実務レベルで増員の必要性を感じていらっしゃるということですね。非常に嬉しく思います。

●全体の流れをイメージして時間内に終わらせる

荻原：白岩さんは、いつからこちらで勤務をスタートしたのですか？

白岩：6月5日からです。非常勤というかたちで、週に2日勤務しています。

荻原：1日の仕事量はどのくらいですか？

白岩：相談件数は平均すると3～4件ですね。他にも検査業務を担当させていただいて、こちらは平均5～6件ぐらいです。

荻原：検査の報告書は、その日のうちに記入されるんですか？

白岩：検査が終わったら、すぐに書類を記入します。例えば午前中の免許更新は11時までなので、それまでに書類をご本人にお返ししないと、その方は流れに乗れなくなってしまうんです。

田中：時間との勝負というところがあるんです。

荻原：そのためにも、全体の流れをイメージして動く必要があると。

白岩：書類を記入しつつ、順番通りに検査を進めるためにも、ほかの職員の方と声をかけ合いながら仕事をしている感じです。

田中：白岩さんに来ていただいて、検査にも無駄がなくなっているのではと思っています。白岩さんは専門家なのでスピードが速いし、正確です。検査の精度アップは県民サービスの観点からも重要なので、その面でも白岩さんに来ていただいてよかったと思っています。



藤田佳男委員長



荻原喜茂副会長

●スキルアップのためのトレーニングにも

荻原：白岩さん、さきほど田中警部補から警察カルチャーという話がありましたが、実際に驚かれたことはありますか？

白岩：いえ、そんなことはないですね。みなさん温かく迎えてくださって。机もご用意いただき、もったいないほどの環境をご準備いただいたので、カルチャーの違いを感じることなく勤めさせていただいています。

田中：警察は体育会系の社会ですからね。作業療法士の世界にも先輩後輩というのはあるのでしょうか？

白岩：そうですね。それはありますね。チームがあるところも似ている気がします。所属する班や、その中での役割とかですね。

荻原：これまで病院で経験してきたことや、研修会で学んできたことは役に立ちましたか？

白岩：そうですね。ただ、戸惑うことも多かったですね。病院ですと、例えばサマリーなどがあるので、基本情報を踏まえたうえで患者さんから聴取できますが、こちらでは基本情報がないまま、窓口に来られた方から聴取します。まだ手探りの状態で、周りの方にご助言いただきながら取り組んでいます。

荻原：ご本人が抱えている問題を引き出して、何らかの方向を見いだす。これはよいトレーニングになるんじゃないですか？

白岩：はい。周りの方が聴取されているのを拝見する

のもトレーニングになります。個人的には、「こういう可能性もあるかもしれない」と考えながら聴くことを心がけていて、これもトレーニングになっていると感じます。ただ、どう対応すればよいか迷うことも多いです。

荻原：どういう点が難しいですか？

白岩：そうですね…。診断書を出していただくようお願いするべきか悩むことがあります。脳卒中の方でしたら、基本的にお願ひするのですが、他の疾患では判断が難しいことがあります。田中警部補をはじめ、他の警察官の方、事務の方にご相談しながら、進めさせていただいています。

3. 作業療法士への期待

●医療機関との連携のきっかけに

荻原：今後、作業療法士に期待されることはございますか？

田中：最初に「研修をしてもらえる」という話をしましたが、白岩さんに毎月「ホワイトロックレポート」を作っていただいて、県下の全警察署に配布しているんです。

荻原：「ホワイトロックレポート」ですか？

田中：「白岩通信」だと固いので「ホワイトロックレポート」(笑)。

白岩：命名は田中警部補です。

田中：白岩さんの存在を、アピールしたいので(笑)。



対談場面

もうひとつ期待したいのは、神奈川県作業療法士会さんとの連携が進むことです。白岩さんもびっくりされていましたが、何度も適性検査を受けに来られて、そのたびに不合格になる方もいらっしゃるんです。連携が進んでこうしたケースがなくなれば、ご本人の負担も減りますし、検査を受けに来られた別の方の待ち時間も減るはずですから。

荻原：なるほど。こちらにアクセスするまでに、運転の可能性を含めて評価やリハビリテーションがされていないと、なによりもご本人が困ってしまうということですね。

田中：なかには、「昨日病院を退院して、明日からリハビリテーションが始まるんです」という方もいらっしゃると思います。「ある程度をリハビリテーションされてから、こちらに来られたほうが」とお伝えするのですが…。気持ちが急いてしまうのも、理解できるんですけども…。

荻原：作業療法士が、これまで以上に運転に関するフォローをする。それは患者のためになるだけでなく、免許センターの業務の効率化や精度アップにもつながるということですね。

●運転免許センターで求められる能力とは？

荻原：今後、白岩さんのように作業療法士が運転免許センターで働くとして、どのような方が適任だと思いますか？

白岩：私自身、聴取にとっても苦心しているところがあるので、返ってくる言葉の内容だけではなく、表情や仕草も読み取れる方が適任ではないかと思います。また、ときには語気が強い方が来られることもあるので、毅然とした対応ができることも求められると思います。

荻原：なるほど。いくら検査の技術が高くても、対応が不適切だったり説明が不十分だったりすれば、利用者の方を不快にさせてしまいます。気持ち良く検査を受けていただくには言葉が重要なのでしょうか。

白岩：そうですね。その方に合わせて言葉を選ぶというか…。

荻原：そうそう。

白岩：自分が言葉を発したとき、相手の表情を読み取るようにしないと、伝えたつもりなのに実際には伝わってなくて、検査がスムーズに進まないこともあります。利用者の方に、ご自身の力を十分発揮していただくためにも、どう説明する

かが大切だと思います。

4. 医療と行政の連携、そのために作業療法士ができることは？

●きちっと評価して適正な診断書を作る

荻原：今後、取り組みたい活動がありましたら聞かせてください。

白岩：田中警部補からもお話がありましたが、医療との連携の仕組みを作っていきたいと思っています。再検査を繰り返す方の大多数は、運転リハビリテーションを受けていらっしゃるんですね。そういった方が運転リハビリテーションを受け、適切な評価を受けたうえで運転に取り組むことができる仕組みづくり、それが一番取り組んでいきたいことです。

荻原：素晴らしいですね。県民サービスとして、必要としている方が受けられる環境づくりを、ぜひ白岩さんに頑張ってもらいたいと思います。最後に、運転に関わっている作業療法士に伝えたいことがあれば、お願いしたいのですが。

白岩：診断書を受け取る側になって思うのは、医師を含めたチーム医療の中で、しっかりと評価して、適正な診断書を作ってご本人にお渡ししたいということです。

荻原：それは大切なことですね。

●相談・評価の仕組みの存在を患者さんに知ってもらう

白岩：また、必要性がある患者さんには、適性相談や適性検査のをご説明いただきたいと思います。現時点では、免許更新期間の病状申告を除いては、臨時適性検査を受けることに関して法的な拘束力はありません。ただ、更新期間以外にも病状申告をしていただくことで、適性検査に適うかを相談したり、評価したりする仕組みがあることを、病気になった方にアナウンスしていただきたいと思います。情報を知らないことは、患者さんにとって不利益になると思うんです。

荻原：なるほど。この点について、運転と作業療法委員会ではどんな議論をされているのでしょうか？ せっかく同席していただいているので、藤田委員長のご意見を聞きたいですね。

藤田：ありがとうございます。2014年の法改正で、診断書を書く頻度が増えたこともあり、運転に関して最低限の助言をしてくれる急性期病院が増えました。今後は、適性相談は任意だけれども、相談を受けることはご本人にとって利益があることを、ぜひ患者さんに伝えてほしいと思います。併せて、運転が難しい患者さんに対しては、そのことを丁寧に説明していただきたいと思います。運転は重い社会的な責任がある作業です。安易にほかの作業と同等に扱うことは、患者さんやそのご家族にとって、また社会にとっても利益にはならないと思うんです。

田中：その通りだと思います。われわれも、県民の命を守るために死亡事故を減らすことに力を入れています。ぜひ、作業療法士のみなさんにもご協力いただき、医療と行政が連携する体制整備が進めばよいと考えています。

藤田：お二人は「運転教育課」に所属されています。この組織名からもわかるように、運転には教育が大切なんですね。われわれ作業療法士が、リハビリテーションだけでなく患者さんへの指導もしっかり行うという意識をもてば、死亡事故の減少に貢献できると思うんです。

荻原：教育で重要なのは、適切な情報提供だと思います。医療機関もそれを行うということですね。

田中：医療関係者の方の力は大きいと感じています。白岩さんには、ユニフォームを着用していただいているんですね。プロが関わっていることは、相談者にとって安心につながると実感しています。

荻原：ありがとうございます。本日お二人からお話を伺って、作業療法士が、神奈川県民のみなさんに有益なサービスを提供するうえでお役に立っていることがわかりました。